

発達障害・知的障害をもつ者の青年期のきょうだいの進路選択に関する研究 —個別の語りを通して—

木村 芽生*・鳥居 深雪**・池田 浩之***

本研究の目的は、特別支援学校の教員を進路として選択した青年期のきょうだいの、意思決定の過程と背景要因を明らかにすることであった。発達障害または知的障害をもつ者のきょうだい、特別支援教育を専攻する大学4年生の3名を対象に、個別の半構造化面接をオンラインで実施した。KJ法を用いた分析の結果、「ソーシャルサポート」、「家族関係」、「自己形成」の3カテゴリーが抽出された。サブカテゴリー間で関連が見られたものもあった。結果から、良好な家族関係や充実した社会的資源が、進路選択も含めたきょうだいの自己形成に肯定的な影響を与えた可能性が示唆された。また、研究参加者及び同胞の属性、個別の経験や思いを示すライフストーリーに着目すると、きょうだいとしての経験や将来への捉え方に個性がみられた。今後の課題は、様々な進路選択を行ったきょうだいを対象に、多様な価値観やその形成過程を明らかにすることである。

キーワード：発達障害，知的障害，きょうだい，青年期，進路選択

1. 問題と目的

障害をもつ者（以下、同胞）の兄弟姉妹（以下、きょうだい）が直面する問題や支援の必要性については近年、国内外の多くの研究において示されてきている。欧米では家族支援に本人や親支援と並んできょうだい支援が位置付けられ、公的機関で事業化されているケースもある（阿部・小林，2012）。日本においても2013年の「障害者総合支援法」施行に向けて、障害をもつ者の生活の地域移行・脱施設化が推進され、家族全体のQOL向上の観点から家族支援が重視され始めた。しかし公的サービスの内容は親支援が中心であり、きょうだいは対象に含まれず（小林・阿部・吉田・藤井，2018）、その当事者性に目が向けられることは少ない（吉川，2001）。きょうだい支援を行う民間の団体や組織の活動は、親睦交流以上になり

えていないとの指摘もあり（柳澤，2007）、障害の種類や年齢・発達に応じた支援の精緻化が必要であるといわれている（阿部・神名，2015）。

障害の種類に関して、発達障害は障害特性が見えにくく、周囲の理解が困難な障害であり（鳥居，2020）、特性や行動に関するきょうだい自身の理解が求められる（高野・岡本，2011）。武田・熊谷（2015）は、社会性とコミュニケーションの障害を主徴とする自閉スペクトラム症（以下、ASD）をもつ同胞の、きょうだい関係への影響に着目し、行動問題や知的障害の有無との関連を指摘した。また、厚生労働省（2007）の「知的障害児（者）基礎調査」によれば、在宅者のうち76.3%が家族と暮らしており、知的障害をもつ者のケア役割を担う家族は多いといえる。親の高齢化や親なき後を見据えると、長く続くきょうだい関係や、きょうだい自身の生活への影響を含めた視点が重要であり、個々のニーズを明らかにすることが欠かせない。

きょうだい研究の動向として、幼児期から児童期にかけての心理的特徴や影響要因、支援プログ

* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

** 関西国際大学

*** 兵庫教育大学発達心理臨床センター

ラムの開発に関する研究が数多くみられる。米国できょうだい支援の先駆けとなるSibshopを開発したMeyer & Vadasy (2007) は、きょうだいが家族や周囲に対する罪悪感、孤独感、不公平感、責任感、将来への不安、恥ずかしさ、等を感じやすいと指摘した。心理的特徴への影響要因としては、きょうだいの性別や出生順位、同胞の障害の種類や程度、家族構成や経済的状況、同胞との同居または別居、両親の養育態度 (三原, 2000)、夫婦関係 (Rodrigue, Geffken, & Morgan, 1993)、フォーマル (施設・機関・団体)・インフォーマル (近所・親戚・友人) ソーシャルサポート (高瀬・井上, 2007)、等が報告されている。

また、きょうだいが直面する問題には、同胞を育てる家族システム内の親子関係が関与しており (阿部・神名, 2015)、親の感情やストレスのあり方が影響し、きょうだいが心理的ストレスや抑圧を感じる場合も少なくない (柳澤, 2007)。きょうだいは同胞や親を支える役割を担う傾向があり (竜野・山中, 2016)、母親がきょうだいに相談相手としての役割を期待することや、同胞の代わりに過剰な期待をかけることがある (吉川, 2001)。このように、きょうだいは家族や周囲に対して特別な役割を担い、様々な葛藤を抱く傾向があることが示されている。一方で、きょうだいの置かれる状況は個別性が高く、それぞれの経験や思いに対する理解が必要であると考えられる。

現状のきょうだい研究の課題として、青年期のきょうだいへの調査不足と、きょうだいの適応状態に関する肯定的側面への着目不足が挙げられる。原・西村 (1998) は青年期のきょうだいに対する調査不足を指摘しており、彼らは家族や社会の中で生きていく上で様々な側面において揺らぎを抱える可能性があるが (沖潮, 2016)、その思いや考えを汲み取る場はまだ少ないのが現状であるといわれている (春野・石山, 2011)。青年期は自己の人生のための重要な選択や決定が発達課題であり (笠田, 2014)、特に大学生は進路選択が本格化する重要な時期である (任, 2021)。きょうだいが進路を選択するうえで、将来の同胞のケ

アへの責任を感じる可能性があることや (笠田, 2013)、同胞の影響を受けて福祉や教育関係の職種を選択する傾向があること (三原, 2000) が示唆されている。このように、きょうだいの青年期の進路選択に、同胞の存在が大きく影響する可能性があるといえる。

適応状態に関しては、同胞の存在がきょうだいの心理的問題や行動面の問題に負の影響を与える、とする研究が多くみられる (浅井・杉山・小石・東・並木・海野, 2004)。しかし、きょうだいは抑うつや不安、同胞とのコミュニケーションの問題等を抱えながらも、他者への向社会的行動が増加する傾向があることや (Pourbagheri, Mirzakhani, & Akbarzadehbaghban, 2018)、障害に対する受容性や共感性が高いことも示唆されており (Watson, Hanna, & Jones, 2021)、これらの強みへの着目も重要であるといえる。また、人格や価値観の形成に、同胞の存在が肯定的影響を及ぼす側面もあるといわれ (柳澤, 2007)、前述の三原 (2000) が指摘した進路選択の傾向とも関連があると思われる。その中でも、障害をもつ者の自立や社会参加を支援する特別支援教育は、福祉と教育の架け橋になると考えられる。

以上を踏まえ本研究では、特別支援学校の教員を進路として選択した青年期のきょうだいの、意思決定の過程と背景要因を明らかにすることを目的とした。きょうだいの経験や価値観の個別性を明らかにするため、半構造化面接を用いた。きょうだいの強みに着目し、今後の研究に新たな方向性を示すことが、本研究の意義である。

2. 方法

2-1. 研究参加者

発達障害または知的障害をもつ同胞のいる大学生のきょうだいを対象に、A県及びB県の2大学で特別支援教育を専攻する者に対して、インターネットを介して募集を行った。その結果、特別支援学校の教員を志望する3名の協力が得られた。

2-2. 手続き

研究参加者一人あたり約45分間の半構造化面接を、1回ずつ実施した。COVID-19の状況を鑑み、研究参加者と実施者各々の自宅にてインターネット回線に接続し、オンライン会議システムを用いて面接を行った。参加者個人宛てのEメールで会議のURLとパスワードを送付し、実施者が本人確認を行ったうえで入退室を許可した。事前に承諾を得て、面接内容を録音・録画・メモにて記録した。面接はX年10月に実施した。

2-3. 質問内容

先行研究で指摘されたきょうだいの心理的特徴及び影響要因と、本研究の目的である進路選択に関する内容を踏まえ、これまでの経験や現在、将来に対する思いを尋ねる質問項目を作成した。はじめに「基礎的情報に関する質問」として、研究参加者及び同胞の属性・家族構成に関する情報を尋ねた。ソーシャルサポートを受けた経験、家族関係（親子関係・きょうだい関係）、同胞の特性や行動で困った経験等で構成した「過去の経験や家族関係に関する質問」、家族や同胞に対する思い、親から感じる期待、自身の悩み事への対処、進路選択のきっかけ等で構成した「現在の思いや将来に関する質問」を、面接の流れに沿って行った。最後に、「自由に話したい事」を尋ねた。

2-4. 分析方法

面接時の記録データから逐語録を作成し、研究参加者全体のデータを対象に、KJ法を援用して分類した。具体的な手続きは、逐語録のデータを

切片化、コード化し、コードの類似性・共通性に基づきカテゴリー・サブカテゴリーを抽出し、配置に配慮して図解化、文章化、の順に行った。その際に質問内容の「基礎的情報に関する質問」と「自由に話したい事」を除き、これらは考察において分類結果とあわせて検討した。心理学・教育学を専攻する研究室の教員と学生11名に分類過程の検討を依頼し、手続きの妥当性を高めた。また、個別の内容を明らかにする目的で、研究参加者別に面接内容のストーリーラインを記述した。

2-5. 倫理的配慮

実施にあたり、研究参加者に研究の趣旨、データの取り扱い、個人情報保護に関して説明し、同意を得た。同意を得た後でも面接を中断できること、無理のない範囲で話してもらうこと、体調が優れない場合はすぐに申し出てもらうこと等の留意事項の説明も行った。プライバシー保護の観点から、面接時に研究参加者と実施者の周囲に第三者が存在しないことを確認した。また、面接自体が傷付き体験とならないよう（高瀬・井上、2007）、ラポールを十分に形成した上で質問を開始し、面接後に振り返りを行う、といった心理的配慮を行った。

3. 結果

3-1. 研究参加者の概要

研究参加者及び同胞の属性をTable 1に示した。研究参加者はいずれも女性、大学4年生で、特別

Table1 研究参加者及び同胞の属性

	性別	所属	専攻	家族構成	同居家族
				診断（判定）	診断（判定）時期
研究参加者A	女	大学4年生	特別支援教育	父・母・弟（同胞）	父・母・弟（同胞）
Aの同胞	男	特別支援学校 高等部1年生		ASD	2-3歳頃
研究参加者B	女	大学4年生	特別支援教育	父・母・兄（同胞）・双子の妹	父・母・双子の妹
Bの同胞	男	障害者支援施設 入居7年目		知的障害・ASD・強度行動障害	1歳半頃
研究参加者C	女	大学4年生	特別支援教育	父・母・弟（同胞）	父・母・弟（同胞）
Cの同胞	男	特別支援学校 高等部3年生		知的障害・CFC症候群 ・肢体不自由・弱視	就学前

注）ASD：自閉スペクトラム症、CFC症候群：Cardio-Facio-Cutaneous 症候群。

支援教育を専攻していた。研究参加者Aの家族構成は、父・母・弟（同胞）の4人であり、同胞は同居していた。同胞は男性、特別支援学校高等部1年生であり、ASDの診断を2,3歳頃に受けた。研究参加者Bの家族構成は、父・母・兄（同胞）・双子の妹の5人であり、同胞は別居していた。同胞は男性、障害者支援施設入居7年目であり、知的障害・ASD・強度行動障害の診断（判定）を1歳半頃に受けた。研究参加者Cの家族構成は、父・

母・弟（同胞）の4人であり、同胞は同居していた。同胞は男性、特別支援学校高等部3年生であり、知的障害・Cardio-Facio-Cutaneous症候群（以下、CFC症候群）・肢体不自由・弱視の診断（判定）を就学前の時期に受けていた。

3-2. KJ法を用いた分析

(1) 分類結果：データの内容と発言者、コード化、カテゴリー化の結果をTable 2に示す。研究参加者全体の107のデータから、3カテゴリー、7サ

Table2 KJ法を用いた分類結果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	データ（発言者）
ソーシャルサポート	フォーマルサポート	福祉サービス	同胞が福祉サービス（療育・デイサービス）を利用していた（A・B）
		学校・地域のサポート	同胞の学校と地域が主催する行事できょうだい交流ができた（B） 同胞の学校の教員が手厚く指導してくれた（C） 同胞の塾の先生が学校と連携して指導してくれた（C）
	インフォーマルサポート	親族のサポート	祖父母によく遊んでもらった（A・B・C）／祖父母が留守番を見てくれた（B・C） 同胞以外の兄弟姉妹と支え合った（B）
		友人のサポート	留守番中に友人とよく遊んだ／友人に悩み事を相談する（A）
家族関係	家族全体の関係性	親密な家族関係	家族は仲が良い（A・B・C）／家族に何でも話せる（A・C） 家族のおかげで経験を乗り越えられた（C）
		家族内の位置関係	同胞の優先順位が高い（C） 同胞とはきょうだい関係よりも親子関係に近い（C）
		家族への責任感	親に迷惑をかけたくない／同胞の事は我慢できる（B） 将来同胞の世話をするのは当然だと思う（C）
		親密な親子関係	親（特に母親）と仲が良い（A・B・C）／母に何でも相談する（C）
	親との関係性	親との同胞に関する話	同胞の障害について説明を受けた（A） 同胞の問題行動について相談した（B・C） 同胞の学校や進路に関する相談を受ける（A・B・C） 同胞の世話への期待は感じない（A・C）／「自由に生きて」と言ってくれた（B）
		親の前向きな養育態度	同胞を大事にしている（A・B・C）／愛情深く育てている（B） 同胞の子育てへの前向きな姿勢を尊敬する（B） 進路を応援してくれている（A）
	同胞との関係性	同胞への感情	仲が良い／かわいい／穏やか（A・C）／気にかかる（C） 嫌いではない／年が離れていて怖かった／距離をとっていた（B） 同胞の成長を実感する（A・B）／同胞のコミュニケーション能力が向上した（A） 学校が楽しそうだと安心する（A・C）／多趣味で羨ましい（A）
		同胞の特性への戸惑い	特性のことで怒った（A・C）／我慢した（B） コミュニケーションをとるのが難しかった（A・B・C）／一緒に遊べなかった（B） 特性によるこだわりや問題行動が嫌だった（A・B・C）／加害が怖かった（B） 外出時の問題行動が嫌だった／周囲の視線が恥ずかしかった（A・B・C）
		同胞の社会生活への不安	学校や施設での問題行動が不安だった（B） 病気や怪我が心配だった（C） 進路が気がかりだった（A・B）
	自己形成	内面的成長	小学校で流行した自閉症に関する漫画を読んだ（A） 学校での生き生きとした同胞の姿に衝撃を受けた（B） 留学先で言葉が通じず同胞に共感した（A）／障害のある人の家族に共感する（C） 障害への理解が深まった／特性に慣れた（A・B）
		自己肯定感	自分の成長を実感した（A・B） 苦労した経験のおかげで夢が持てた（B）／人生経験になった（C）
		精神的成熟	思いやりが生まれた（B） 我慢強い／何でも自分で解決する（B） 人に気を遣う／人の顔色を伺う／距離感を保つ（B・C）
		進路選択	特別支援学校教員への関心 同胞の影響で自然と関心を持った（A・B・C） 実習が楽しかった（A）
	進路選択	他者支援への関心	障害のある人やその家族を支援したい（C） 人を助けたい／笑顔の生まれる場所で働きたい（B） 福祉職に関心を持った（B・C） 相手に深入りしすぎないのが不安（C）

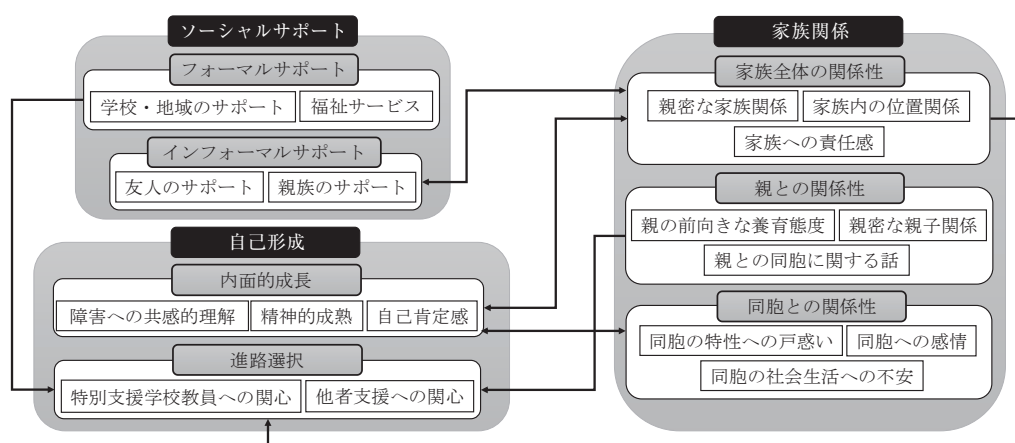


Fig.1 KJ法を用いた分類結果の図解

ブカテゴリー、18コードが抽出された。文中の □ はカテゴリーを、◇ はサブカテゴリーを示す。

[ソーシャルサポート] は、◇フォーマルサポート◇が2コード、◇インフォーマルサポート◇が2コードで構成された。全員に共通するデータを含むコードは「親族のサポート」であった。[家族関係] は、◇家族全体の関係性◇が3コード、◇親との関係性◇が3コード、◇同胞との関係性◇が3コードで構成された。全員に共通するデータを含むコードは「親密な家族関係」「親密な親子関係」「親との同胞に関する話」「親の前向きな養育態度」「同胞の特性への戸惑い」であった。[自己形成] は、◇内面的成長◇が3コード、◇進路選択◇が2コードで構成された。全員に共通するデータを含むコードは「特別支援学校教員への関心」であった。

(2) 分類結果の図解化：Table 2を図解化し、異なるカテゴリーのサブカテゴリー間の影響及び関連を示した (Fig. 1)。図解中の片側矢印は影響、両側矢印は関連を示す。同胞の学校の教員や行事が特別支援学校への関心に繋がったことから、◇フォーマルサポート◇は◇進路選択◇に影響を与えた。障害をもつ者の家族に共感し、支援に関心を持ったことから、◇家族全体の関係性◇は◇進路選択◇に影響を与えた。親の後押しが進路に対する肯定感に繋がったことから、◇親との関係性◇は◇進路選択◇に影響を与えた。家族内のサポートにより苦労した経験も乗り越えたことから、◇インフォーマルサポート◇と◇家族全体の関係性◇

の関連がみられた。我慢強さが家族への責任感と精神的成熟の内容に共通することから、◇家族全体の関係性◇と◇内面的成長◇の関連がみられた。同胞と過ごした経験が内面的成長の全ての側面に影響し、また、共感的理解が同胞への感情に変化を与えたことから、◇同胞との関係性◇と◇内面的成長◇の関連がみられた。

3-3. 個別のストーリーライン

(1) 研究参加者A：家族は皆穏やかな性格で仲が良く、何でも話せる関係であり、年下の同胞とも仲が良くてかわいい、と話した。幼少期は同胞の常同行動やコミュニケーション、外出時の問題行動に対して不満を抱いていたが、特性への慣れや同胞のコミュニケーション能力の向上によって理解が進んだ。小学校時代に親から同胞の障害について説明を受けた経験や、自閉症をテーマにした流行りの漫画を読んだ経験、高校時代の留学先で言葉が通じず同胞に共感した経験が障害理解に繋がった。同胞の影響で自然と特別支援学校の教員を志望するようになり、実習が楽しく、「親も応援してくれている」と話した。母親から同胞の進路や学校に関する相談も聞かすが、同胞の世話に対する期待は感じていなかった。悩み事は少なく、友人と話して解消することが多い。また自身は友人と過ごすことが多いが、「同胞は多趣味で、一人でも楽しめるのが羨ましい」と語った。同胞は療育、デイサービスを継続的に利用していた。

(2) 研究参加者B：同胞は嫌いではないが、年上

で年齢差も大きく、髪を引っ張る等の加害の特性があったため、「怖くて避けることもあった」と語った。コミュニケーションが取れず、幼少期は一緒に遊べなかった。学校や施設、外出先での問題行動に対しても不安を抱えており、同胞の進路が気がかりだった。親に迷惑をかけたくないという思いから我慢することが多かったが、双子の妹と一緒に乗り越えられたと感じていた。親子関係は良く、「親は同胞を愛情深く育てており、子育てを振り返って分析しているのがすごい」と尊敬していた。同胞の入居先が決定した時には、親から「安心して自由に生きて」と後押しされて嬉しかったことを話した。特別支援学校の行事で、同胞の生き生きした様子に衝撃を受け、「笑顔が生まれる場所で働きたい」と感じた。苦労した経験もあったが、そのおかげで特別支援学校の教員になるという夢が持てた。学びを深める中で障害への理解や思いやりが育まれ、自己の成長を実感していた。自身については、我慢強く何でも自己解決し、人に気を遣う性格であると話した。同胞はデイサービスに継続的に通い、留守番中は祖父母がよく遊んでくれた。小学校時代に同胞の学校と地域が主催する家族も参加できるイベントで、「同じ境遇の仲間がいることを実感できて楽しかった」と振り返った。面接の最後に、他のきょうだいが年下の同胞をかわいいと話すのが不思議であることや、「話せてすっきりした」という感想を述べた。(3) 研究参加者C：家族は仲が良く何でも話し、特に母親と親しく、悩みも全て相談している。同胞とは幼少期以降に関わりが多くなり、自身は母親の立場に近く、常に気がかりだった。家族内の同胞の優先順位は高く、親から進路の相談を受けることもあり、将来同胞の世話をするのは当然だと感じていた。同胞は穏やかで友人とも仲が良く、問題を起こさないが、食事のこだわりへの不満や病気への不安があった。自身の経験について、「家族のことは人生経験になった」、「家族関係が良かったから乗り越えられた」、「人の顔色を伺って、気を遣えるようになった」と振り返った。進路選択については、同胞と過ごす中で自然と特別支援

学校の教員を目指すようになった。また、障害をもつ者やその家族への共感や、支援をしたいという思いから、対人援助職に関心を持つ一方で、「相手に入れ込んでしまうため向いていない」とも語った。同胞は福祉サービスの利用は少なく、学校や個人塾の先生が手厚く指導してくれた。自身の幼少期は祖父母の家で過ごすことが多かった。

4. 考察

本研究の目的に従い、KJ法を用いた分析結果から、〈進路選択〉を含む〔自己形成〕に着目し、〈内面的成長〉と〈進路選択〉、〔家族関係〕と〔自己形成〕、〔ソーシャルサポート〕と〔自己形成〕、の関係について述べ、最後に総合考察を行う。また、研究参加者の概要及び個別のストーリーラインから、きょうだいの個別性について論じる。

4-1. 内面的成長と進路選択

本研究における参加者は共通して、同胞のいる家族の中で育つ過程で、特別支援学校の教員を自然と志した。障害のある同胞と過ごす中で育まれた共感的理解や精神的成熟が、きょうだい自身の自己肯定感を高め、内面的成長を促進したといえる。このような経験を通したきょうだい自身の成長により、障害をもつ者の成長を支える職業に関心を抱いたと考えられる。また、同胞のいる家族の中で育った経験により、障害をもつ者の親やきょうだいを含めた家族全体に対する理解や共感が深まり、他者支援への関心に繋がったといえる。

自己形成における障害への共感的理解のきっかけとして、家族の影響だけでなくきょうだい自身の学校や留学先での体験が挙げられており、学校をはじめとする家庭以外での幅広い経験も、きょうだいの価値観の形成に重要な影響を及ぼしたことが示された。このことから、きょうだい自身の自己形成に関わる、障害理解も含めた様々な体験の機会を得られる場の提供が、家庭や学校、地域において必要であると考えられる。

以上を踏まえると、きょうだいの進路選択と自己形成の間には、密接な関わりがあるといえる。

柳澤（2007）は、きょうだいがかかる状況は家庭以外での社会的な場面における経験などにも影響すると指摘し、本研究においても成長過程で家庭内外の様々な経験を統合していく中で、進路選択を含めた自己形成を発達させたと考えられる。

個別性の観点からみると、研究参加者Aは同胞との仲の良さ、障害理解に繋がる社会経験、実習の楽しさ、といった同胞への共感や多様な印象深い体験学習により、特別支援教育への興味関心が高まったといえる。研究参加者Bは、学校での同胞の楽しそうな姿を見て衝撃を受け、「笑顔の生まれる場所で働きたい」という目標を持ったことや、苦労した経験や我慢した経験を乗り越えて同胞や自身の成長を強く実感できたことが、進路選択に繋がったといえる。また、我慢強さや人への気遣いといった精神的成熟度の高さも特徴的であり、対人援助に対する思いの強さにも関連していると考えられる。研究参加者Cは、進路選択のきっかけとなる明確な出来事は語られなかったが、自身の人生経験に対する肯定感や、障害をもつ者を含めた家族全体への支援に対する志向が強く、きょうだいとしての立場や親に対する共感が関与したといえる。また、他者への気遣いや対人援助に対する関心の高さだけでなく、相手に気を遣いすぎることや共感しすぎることへの懸念も語られたのが特徴的であった。以上のことから、きょうだいの進路選択には共通して同胞の影響がみられるが、そこに至る経験や思い、自己形成の過程には、個別性や多様性があるといえる。

4-2. 家族関係と自己形成

家族全体や親との関係性から、本研究におけるきょうだいは家族と親密な関係を築き、良好な家族関係の中で育ってきたといえる。親密な家族関係と、親の心理的余裕や安定感、同胞への愛情ある育て方、きょうだいへの関心の向け方、等の要因が相互に関連したと考えられる。こうした親の前向きな養育態度は、きょうだいの同胞に対する理解に肯定的影響を与え、きょうだい自身の内面的成長を後押ししたといえる。親がきょうだいに対して直接的に、自由な生き方を尊重するような

言葉掛けをしたことも、将来に対するきょうだいの安心感や、自身の進路に対する前向きな姿勢に繋がった可能性がある。笠田（2013）は、親から自由なライフコース選択を保障してもらうことが、きょうだいの葛藤の解決に繋がったことを示唆しており、本研究でも同様の肯定的影響がみられた。また、同胞が早期から障害の診断や療育を受け始めたことや、親がきょうだいに同胞の障害について説明していたことも考慮すると、障害に対する親の理解や前向きな養育態度が、きょうだいの同胞や障害に対する理解や態度に影響したといえる。

同胞との関係性に関しては、幼少期には同胞のこだわりやコミュニケーションの困難さといった特性への戸惑いを感じており、発達障害の障害特性に対する周囲の理解の難しさの影響が指摘できる。しかし、同胞との関わりの中で特性に対する理解が生まれ、互いの成長を実感し、同胞に対する感情にも変化を与えたことがわかる。このような経験を乗り越えられたことが、きょうだい自身の自己肯定感や、我慢強さ、人への気遣いといった精神的成熟に繋がり、内面的成長を支えたと考えられる。Rodrigue et al.（1993）は、同胞との関係性や家族関係が、きょうだいの個人・家族・社会的役割への適応に関連する可能性を指摘しており、本研究においても家族関係が、社会的側面も含めた自己形成全体に重要な影響を及ぼしたといえる。

個別性の観点からみると、同胞の性格や特性、行動、社会生活上の問題には個人差があり、同胞との関係性や家族への責任感、精神的成熟等との関連が指摘できる。これには属性も関与していると考えられる。出生順位に関しては、研究参加者AとCが年下の同胞、研究参加者Bが年上の同胞であり、同胞に対する感情の複雑さや、将来の同胞の世話に対する意識に違いが見られた。研究参加者AとCは同胞の世話に対する意識や抵抗感がほとんど見られなかった一方で、研究参加者Bは同胞の将来に対する不安を抱えており、出生順位が一つの影響要因として考えられる。同胞の診断の

関しては、研究参加者Bにおいては攻撃性の高さが同胞との関係性全体に影響したことや、研究参加者Cにおいては外観から理解しやすい身体的な特性が、同胞との関係性や世話への意識に影響したこと等が指摘できる。家族構成に関しては、研究参加者Bにとっては共感し合える双子の存在が、同胞との関係性に影響を及ぼしていた。このことから、武田・熊谷（2015）が述べたように、同胞以外の兄弟姉妹との関係性やソーシャルサポートといった、きょうだい関係が補償される場の重要性が示唆された。また、Bは現在別居している同胞との関係や自身の経験、親の養育態度を、省察しながら俯瞰して捉える傾向がみられ、同胞との同居または別居という違いも影響したと考えられる。このように、きょうだいの置かれる環境は個々で異なり、経験やそれに対する感情も発達段階で変化することから、一元的・固定的な見方ではなく、多様な経験や複雑で変化しやすい感情に対する理解が求められるといえる。

4-3. ソーシャルサポートと自己形成

本研究における参加者の、ソーシャルサポートを受けた経験には共通点が多くみられた。フォーマルなサポートに関しては、学校や地域のサポート経験に肯定的な印象を抱いており、福祉サービスだけでなく、学校や地域によるサポートが担う役割も大きいことがわかる。また同胞の支援に関わる、教員をはじめとする身近な大人の存在が、きょうだいの進路選択に影響を及ぼした可能性も指摘できる。しかし、同胞に対するサポートはみられた一方で、きょうだい自身に向けたフォーマルサポートはほとんどなく、先行研究においても指摘されたように、きょうだい支援が未だ拡充していないのが現状であるといえる。また幼少期のきょうだいの、同胞に対する戸惑い経験も踏まえると、発達障害の特性や同胞の特徴への理解を促すための、個別の状況や発達段階に合わせた具体的なサポートの必要性があると考えられる。

インフォーマルなサポートに関しては、祖父母のサポートの占める割合が大きく、同胞以外の兄弟姉妹の存在も支えになっていた。親やきょうだ

いが、同胞の障害について周囲に話すことに抵抗があり、理解やサポートを求めにくい可能性を考慮しても、身近な親族によるサポートの担う役割は大きいことがわかる。きょうだいに対するフォーマルサポートは未発達であることから、インフォーマルサポートの重要性が指摘できる。

本研究においては、きょうだいがソーシャルサポートの経験を肯定的に捉えており、家族関係や自己形成を構築する上での支えになった可能性がある。小林ら（2018）は、障害をもつ者の家族全体のQOL向上に向けた家族支援の重要性を指摘しており、包括的な家族支援の拡充や質の向上が求められているといえる。また、研究参加者Bにおいて「きょうだい交流の経験が楽しかった」、「面接で話せてすっきりした」といった語りがみられ、きょうだい特有の思いや情報を共有できる場が、きょうだい自身の喜びや安心感に繋がる可能性が示された。青年期には同胞の将来に対する不安や責任を感じる者もいると考えられ、年齢に応じたピアサポートやフォーマルサポートの構築により、きょうだい同士の情報共有や感情交流の場を充実させていく必要があるといえる。

4-4. 総合考察

本研究における参加者は、幼少期から青年期に至るまでの成長過程を通して、困難な状況を経験しつつも、良好な家族関係や充実した社会的資源に支えられ、同胞や障害に対する理解を深めていったと考えられる。困難を含む経験を乗り越えたことが、きょうだいの自己肯定感にも繋がり、自己形成に肯定的な影響を与えたといえる。このように、同胞と過ごした経験を糧に、きょうだい自身の人生をより良く生きていくためには、家族をはじめとする身近な人々の積極的な関わりや、取り巻く社会の支えが必要である。様々な経験や思いを受容し、個々の多様な価値観を尊重し、きょうだい自身の成長を励ます存在が重要であると考えられる。

最後に本研究の課題として、対象が特別支援学校の教員を志望する大学生に限られていたため、今後は様々な進路選択を行ったきょうだいを対象

に、多様な価値観やその形成過程を明らかにする必要がある。また、環境や発達段階の変化に伴い、新たな発達課題に直面し、家族や自身の将来に対する思いが変容していく可能性があるといえる。先行研究においても、青年期から成人期への環境の変化について考慮する必要性があることや（沖潮, 2016）、ライフコースに着目することできょうだいの経験の多岐性・多様性に注目できること（笠田, 2013）が指摘されている。これらを踏まえると、今後は様々な立場にあるきょうだいの、経験や思いの変容を捉えていく視点が求められる。

付 記

本研究は、筆者が2020年に神戸大学国際人間科学部に提出した卒業論文に加筆修正を行った。

謝 辞

本研究にご協力頂いた研究参加者の方々、研究の遂行および論文執筆のご指導を頂いた鳥居深雪先生、池田浩之先生に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 阿部美穂子・神名昌子（2015）障害のある子どものきょうだいとその家族のための支援プログラムの開発に関する実践的研究．特殊教育研究, 52(5), 349-358.
- 阿部美穂子・小林保子（2012）イギリスにおける障害のある子どものきょうだいの支援 ―支援プログラムの実際―．富山大学人間発達科学部紀要, 7(1), 153-162.
- 浅井朋子・杉山登志郎・小石誠二・東 誠・並木典子・海野千畝子（2004）軽度発達障害児が同胞に及ぼす影響の検討．児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 360-371.
- 原幸一・西村辨作（1998）障害児を同胞に持つきょうだいの適応に関する質問紙調査．特殊教育研究, 36(1), 1-11.

春野聡子・石山貴章（2011）障害者のきょうだいの思いの変容と将来に対する考え方．応用障害心理学研究, 10, 39-48.

笠田舞（2013）知的障がい者のきょうだいのライフコース選択プロセス ―中年期きょうだいにとって、葛藤の解決及び維持につながった要因―．発達心理学研究, 24(3), 229-237.

笠田舞（2014）知的障がい者のきょうだいが体験するライフコース選択のプロセス ―青年期のきょうだいが辿る多様な径路と、選択における迷いに着目して―．質的心理学研究, 13, 176-190.

小林保子・阿部美穂子・吉田美和子・藤井由布子（2018）障害児等の家族支援プログラムと家族QOLアセスメントの開発．科学研究費助成事業 研究成果報告書, 25380830.

厚生労働省（2007）平成17年度知的障害児（者）基礎調査．厚生労働省, 2007年1月24日, <https://onl.la/xtB6uPB>（2022年7月27日 閲覧）.

厚生労働省（2013）障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（障害者総合支援法）．厚生労働省, 2013年4月1日, <https://onl.la/FQ19jCR>（2022年7月27日 閲覧）.

Meyer, D. J. & Vadasy, P. F. (2007) Sibshops: Workshops for Siblings of Children with Special Needs. Paul H. Brookes, Baltimore, Maryland.

三原博光（2000）障害者ときょうだい ―日本・ドイツの比較調査を通して―．学苑社.

沖潮（原田）満里子（2016）障害者のきょうだいが抱える揺らぎ ―自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し―．発達心理学研究, 27(2), 125-136.

Pourbagheri, N., Mirzakhani, N., & Akbarzadehbagh-ban, A. (2018) A Comparison of Emotional Behavioral Problems of Siblings at the Age Range of 3-9

Year Old Children with Autism and Down Syndrome. *Iranian Journal of Child Neurology*, 12(2), 73-82.

任玉洁 (2021) 大学生における過剰適応が進路選択に与える影響—日中比較研究—. 青年心理学研究, 32, 61-76.

Rodrigue, J. R., Geffken, G. R., & Morgan, S. B. (1993) Perceived competence and behavioral adjustment of siblings of children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 23(4), 665-674.

高野恵代・岡本祐子 (2011) 障害者のきょうだいに関する心理学的研究の動向と展望. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 60(3), 205-214.

高瀬夏代・井上雅彦 (2007) 障害児・者のきょうだい研究の動向と今後の研究の方向性. 発達心理臨床研究, 13, 65-78.

武田瑞穂・熊谷恵子 (2015) 自閉症スペクトラム障害のある児童とそのきょうだい関係—行動問題と知的障害の有無の影響—. 特殊教育学研究, 53(2), 77-87.

竜野航宇・山中冴子 (2016) 障害児のきょうだい及びきょうだい支援に関する先行研究の到達点. 埼玉大学紀要 教育学部, 65(2), 81-89.

鳥居深雪 (2020) 脳からわかる発達障害—多様な脳・多様な発達・多様な学び—. 中央法規.

Watson, L., Hanna, P., & Jones, C. J. (2021) A systematic review of the experience of being a sibling of a child with an autism spectrum disorder. *Clinical Child Psychology and Psychiatry*, 26(3), 734-749.

柳澤亜希子 (2007) 障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方. 特殊教育学研究, 45(1), 13-23.

吉川かおり (2001) 障害児者の「きょうだい」が持つ当事者性—セルフヘルプ・グループの意義—. 東洋大学社会学部紀要, 39(3), 105-118.

A Career Decision of Adolescent Siblings of Persons with Developmental Disabilities and Mental Retardation: Individual Narratives

Mei KIMURA*, Miyuki TORII**, Hiroyuki IKEDA***

*Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education

**Kansai University of International Studies

***Center for Development and Clinical Psychology, Hyogo University of Teacher Education

The purpose of the present study was to reveal the process of decision making and background factors of the adolescent siblings of persons with disabilities who chose the special needs school teacher's course. We conducted 45-minute semi-structured online interviews with three individuals, who grew up with a sibling with developmental disabilities and mental retardation, and were 4th year university students majoring in special needs education. The data were analyzed using the KJ method, which showed the three categories of social support, family relation, and self-development, while some of their subcategories were found to be related. The results revealed that good family relationships and sufficient social resources had positive impacts on self-development, including the career decisions of siblings. In addition, from the perspectives of the participants' demographic variables and descriptions of their personal lives, it was indicated that each sibling had different personal experiences and thoughts about their future. The direction of future research should be to focus on siblings who made various career decisions, and to reveal the diversity of values and their process of formation.

Key Words : developmental disabilities, mental retardation, siblings of persons with disabilities, adolescence, career decisions

